

第2回
「読み解く力」向上研修会

藤江康彦

(東京大学大学院教育学研究科)

「読み解く力」左右の関連

- 読み解く力の左右が関連するような授業をどう創っていくか
 - 子どもがそもそも持っている「読み解く力」を意識化し伸ばしていく、というイメージ

「読み解く力」左右の関連

子どもの主体的な学び（学習環境デザイン）

教材との対話

他者との対話

自己との対話

教材や課題の構造を探り、自分なりに取り出す

知識の活用や組み替え ← 生活・学習経験やこだわり

自分なりに取り出した教材や課題の構造をことばや記号などの「道具」で表現する

多様な理解に基づく多様な表現 ← 他者との交流・協働

自分なりの理論、自分なりのまとめをつくる

知識を創り出す
原理やパターン、仕組みの理解=本質的な理解

見方・考え方の
獲得や活用

再構築

- 前提として、「知識は自分たちで作って
いける」という考えを子どもと教師が共
有している
 - 知識は覚えるものではなく創っていくもの
 - 「正解かどうか」よりも「正解を追究していく過
程」が重要
- 知識を「事実」に基づいて創り上げ、創り
直す＝再構築

授業づくりのポイント

●授業の構造を子どもにもわかりやすくする

本時ではなにが目指されているのか

使用可能なツールはなににか

個人での活動／グループでの活動／クラス全体での活動をどのように組み合わせるか

●教師の役割

教師の発話の価値を高める

しゃべりすぎるから価値が低下する:教師の発話は最小限に

実践者としての生徒、相互作用者としての教師

生徒の実践に教師がどう関与するか

子どもが適応しているから授業が成り立つのだと

いう事実を、まずは受けとめる

授業づくりのポイント

● 多様性を受容する雰囲気を作る

多様な見方や表現が積み重なって、対象がより正確にとらえられる

間違いは正しいことを追究する過程ではない

● 一人ひとりの子どものことばの意味

子どものつぶやき、ふざけ、たどたどしい発話を、その子どもなりの学びの道筋ととらえる

子どもの発話をその子どもの生活経験や学習経験に照らしてとらえ、子どもなりの学びの個性をとらえる

ツールとしてのホワイトボード

- 他者の作業を見ることができる
- 他者の作業に関与することができる
- 意識が集中する

- 書いたり消したりが容易である
- 多様な表現が可能(文字、イラスト)

- ホワイトボードの記述を活動(実験の実施)にどう活かすか？
- 活動(実験)と記述の往復が必要

グループ学習とは

グループ学習＝聴き合い(≠話し合い)

- 「学習」は本来「対話」的である
 - 他者の声を聴き引用することから始まる
- 無理に話し合わせようと思うから騒がしくなる
 - 教師が個々の意見をつないでいくことも必要
- ベースは「個」(「班」との違い)
 - 自我関与
 - 自分にとって切実である＝こだわり、物語がある
 - 個人のパフォーマンスをどれだけ上げていけるか
 - 学習対象と向き合うプロセスをグループで行う
 - 個人課題をグループで行う

話し合いが深まるためには①

• 課題設定

- 子どもが直接経験したこと、既習事項のその少し先に課題を設定する
 - 「やったことある」「知ってる」ことは経験、記憶で処理できる→話し合う必然性がない
 - 知っていることを基盤として課題と向き合う際に他者の考えや経験を知る必然性が生じる
- 子どもがなにを知りたいと思っているかを確認する
 - 子どもにとっての切実な問いを探る
 - 教科の本質に迫ることができるかどうか

話し合いが深まるためには②

• 課題共有

- 自分たちで考えた課題
 - 課題の構造を可視化させる
 - 仮説、条件設定
- 教師が設定した課題
 - そのままでは他人事の課題
 - 「教師がなにをさせたがっているか」を探るのみ
 - いかに課題が自分事になるか
 - 既有知識との関係づけ
 - 比較
 - 共通点・相違点の可視化
 - 認知的葛藤
 - 手続きの明確化（足場かけとしての指導）

話し合いが深まるためには③

• 対象と向き合う時間の確保

- まずはじっくりと学習対象と向き合い、その特徴や構造をとりだし言語化する
 - この過程をグループとして行うことはあり得る
 - ワークシートの活用
 - 言語以外の表現方法も可能にする
- 根拠を明確にした発言を価値づける
 - 話し合い(他者との対話)と学習対象との対話との往還をさせる

話し合いが深まるためには④

• ワークシートの活用

- 教材や課題について自分なりの意見を言語化できる
- なにを話し合えばよいか、なにが論点かをシート上で可視化できる
- 課題解決の流れが一目でわかる
 - 流れに乗れない子どもの支援につながる
 - ワークシートを活用した「ふりかえり」
- (教師にとって)教材と子どもとをどう向き合わせるかを考える

話し合いが深まるためには⑤

- 子ども自身による「話し合い」の選択
 - 話し合いは課題解決の方法の一つであるならば、子どもにとって選択肢に過ぎない
 - 子どもが話し合いたいという場合に、条件が整っていれば選択させる
 - 課題解決における「話し合い」の位置づけが明確である(話し合いの目的が明確)
 - メンバーが十分に学習対象と向き合って特徴や構造をとらえている
 - (子どもたち自身が設定した課題の場合)課題が自分たちのものになっている

話し合いが深まるためには⑥

- 単元レベルで考える
 - 子どもの学習を単元レベルで考える
 - 探究はある程度時間をかけて進む
 - 子どもの学習を「本時」に押し込まない
 - 学習のどの部分が「本時」であるかを考える
 - 「ふりかえり」も単元レベルで考える
- 本単元のどの位置に話し合いを入れると効果的かを考える
 - 毎時間話し合いを入れるかどうかは、話し合いありきの論理
 - ただし、「個」の学習を保障するためのグループ学習はある
 - 「話し合い」と「グループ学習」を混同しない